存在を、思ひ起さずには居られなかつた。

刺す蚊をば手に打ちかねて涙かな。

こうした氣持ちで、凡そ自分に與へられた運命なら、何でも甘受してきた。そして色々と考へあぐんでは、結局もう此の上は、餘計な穿鑿はすまい。只自分に許された唯一の道に身命を捧げて精進すればそれでよい。と一人ぎめにしてはせめてもの心やりとするのがオチだつた。今こゝに二十有餘才の春を迎へても矢張り昔乍らの私以外の何物でもないとしか思へぬのを淋しがらずには居られない。

あすならう日ごと檜の夢を見て。

かうして今日は明日はと一生を碌々として送つてしまう樣になつてゆくのではないかしらん。そんな不甲斐ない生活から逃れ出る事が出來ない自分だとしたら？

私は自分自身を散々はぢしめてやりたい氣分で一杯になつた。餘りに靜かだつたお正月は却つて私に大きな憂愁を投げかけた。五時近くといふにもう日の光りの見られぬ此の薄ギタナイ町並をトボトボと歩いて居る内西方に明星の強くキラキラと光つて居るのを見た。と急に身體中が清々するのを覺えた私は思はず「カアルブツセ」の「山の彼方に」を吟じてみた。するとすぐ、

たづねゆけ山又山を星一ツ。併し此の時又黑い影が心の中をカスめていつた。

三〇

ハーヴード大學天文臺の印象

ケムブリツヂにて　吉田源治郎

「古い！」こう云ふ感じが、ボストンのサウス・ステーションで山本一清氏の御出迎えを受けた時から、私の心に染みこんだ。これがオリバー、ウエンデル、ホルムスの誇る「太陽系の車輪」（ボストン）へ來た當初からの感じである。文明的の明るみの上に何だか古色蒼然たる氣分が蔽ひかぶさつてゐる。歴史のないアメリカの唯一つの歴史のある町！それがボストンだ。

ハーヴードの天文臺の高臺を訪づれたのは八月二十五日の朝、臺内は其體中として人氣がない。山本氏の研究室の一隅に腰を下して、さて、つらつらと考へる。そこへ變光星のカムベル氏がはいつて來られる。山本氏の計算を手にして何かと意見を述べられる。三階造りになつてゐる臺内には、臺員一人一人に割り當てた部屋が、いくつとなくあつて、總計約四十人の臺員が活躍してゐる。その中、男子が五六人、あとはスツカリ婦人、その半分の以上は、五十を越したオールド、メイドー、之れを引き廻して、研究の指揮をするのが年齢四

十にまだ手の屆かないシャプレー臺長。「シャプレーには感心させられる」と山本氏が私に話される。二際の一隅の研究室から出て、臺内くまなく見せてもらふ。玄關の次の部屋は、天井がドォムになつてゐる、昔子午線望遠鏡の据えつけてあつた所今は、社交室兼讀書室。何しろ天上の星の研究に携はる地上の花の多い此天文臺のことだから、平常の空氣の賑やかなこと、そして此部屋がそのチャットの旋風の中心地である！

その次の室は臺長の家に通ずる。そして、此處から、十五吋のドォムへの通路へかけて一面の書棚である。然し、本棚圖書の分類に何の系統も與へてないやうに、見える。天井から、書棚から、凡てが古色蒼然として私の目に映る。「古い！」と云ふ心持が又ひし〳〵と私を包む「此處の主義は人間本位積立金が何萬弗とあるのに、ライブラリーの整理などは第二にして、出來るだけ多くの臺員を雇ひ入れる。然も、給料の割安ですむミスたちを雇ひ入れる。望遠鏡も八十年前に買入れたものをそのまゝ、その裝置も凡て昔のまゝ、然し、その仕事から云つて、此處の天文臺は、世界に誇るに足る大きな仕事をやつてのける」と山本氏の註が加はる。實際、ライブラムーのだらしなき。階段の一隅、廊下の片隅、手あたり次第の所だ。雜然、紛然として無數の本が羅列してある。昨年、ヤーキース天文臺などを覗いた目で此處を眺めると何だがアッシリヤのアシユルバニパルの書庫へ來たやうな「古典的」な味がする。

十五吋の部屋へはひる。ドイッ製の古物、屋根の回轉も、その他の設備も凡て人力仕掛だ。此の望遠鏡は、京都のよりも舊式で、取扱ひ不便ださうである。然し、八十年前にはロシャのプルコワの天文臺と共に、世界一を誇つたものであるその功蹟の數々ある中に、土星の衛星の發見、火星の衛星の光の測定は、この老鏡の若きもの誇りの記錄である。今では、眞面目な觀測には用ひないとのこと。

そこから階段を下りて、反對の方向に行く。蔓の葉のからむ弔橋式の廊下を渡ると、寫眞室の一棟がある。右へはいれば、天文寫眞及びそれに關するものの展觀室、月二回の公開日には、此處へ人々が雪崩れこむ。凡てガラス版に燒き付けたものを、枠にはめ、背後から電燈で透かす工夫になつてゐる。スペクトラムの色々、マゼラン大星雲、小星雲、月、其他、等、等、等、が手際よく、四隅の壁際に展列してある。その奥の部屋が、寫眞保存室、何となく大きな戸棚が並列してあつて、一々番號によつで創立以來此處及び、ペルーの出張所で撮影された寫眞が系統をつけて保存してある。之の仕事に臺員の大方が毎日かゝつてゐる　寫眞の燒付、寫眞による星の計算其他。

二階建の此煉瓦造り建物の半分と階上は、凡て臺員の研究

室作業場になつてゐる。(但し、天文臺の本館は八十年前の木造である!)

此處に働く人々には、可なり變つた人がゐる。今は、外國人としては、オランダ人のライテン氏と山本氏のみであるが古株の臺員の中で

變つた人たちの一人二人を紹介すれば—先づ、第一にミスカノン。五年かゝつて星のスペクトラム二十萬を整理し、その出版に更に十年かゝつてゐる。此の老孃が第一の變り者である。最初はたゞ手傳ひに雇はれて來たのが、今では世界中に一寸その代理が出來る人はないと云はれる迄になつた篤學な女流學者。彼女に次いで、ミス・ウッヅがゐる。此人は、エヂプトでボストン博物館の日本部主任平野女史に出合つて以來同女史と親友になつてゐる。「それは、グリ〳〵とした大きな目玉の人なのですよ、少さな身體でね」と山本夫人の註。ミス・ウッヅは、毎日、平均一つづゝ新星を發見すると云ふので有名である。彼女も又、二十年以上飽かずに毎日、星の寫眞を擴大鏡で睨んでゐる奇特な研究家である。ピケリング臺長(有名なジャマイカのピケリングの令兄で、此處の前臺長)も又この變り者の一人にはいる。彼の机は、是非この「博物館」的天文臺を訪ふ者の見遁してはならない設計をもつてゐる。今日では、シャプレー臺長がそれを襲用して居られる。先づ、此處に、狹い研究室があると想像してみて下さい。その眞中に柱が立つ。その柱を軸にして、ほとんど部屋をふさぐ程の圓形のテーブルが仕掛けてある。そして、柱をめぐつていくつかの棚が車軸狀に配列される。臺長は窓際の明るい所に座を占めてゐる。扨て、彼は計算にとりかゝる。机がグル〳〵と廻り出す、そして、ある角度を廻つた所で、ピタリと止まる。見るとそこは、變光星の部である。其他の部分を調査する必要がある場合—卽ち、一旦緩急あれば、自分は、坐つてゐるまで、テーブルの端に手をつけて、グルット廻すだけの勞である。さうすれば、凡ての研究資料の備えられた机の部分が御用を承りに來る。但し、肱つきは禁物、ウッカリ肱をつけば、テーブルは、グル〳〵と廻り始める。「大いに暗示的である。私も一つこんなのをつくらうと早速さう定める。

本館の外に廣い場面の星の配置を撮影するための一吋レンズの寫眞望遠鏡が備えてある。こんな建物が三つばかり、本院の西側にある。

此處では、あまり觀測には力を入れぬが、ペルーの出張所には、もつと完全な設備があつて、そこでは絶えず觀測や、寫眞撮影に從事してゐる。かのウィルソン山もカーネーギー研究所が關係する迄は、こゝの出張所であつたのである。いづれにもせよ、設備の不完全は、人の數とその努力で完全に償なはれると云ふのが、此印象記の最後のモオラルである。

今一つ拔かしてならぬことは、此處の十五吋の望遠鏡及び

その設備は、全部、有志の手になつたことである。觀測室の壁上に、その由來が記してある。いくつかの天文に興味をもつ團體や個人の醵金が八十餘萬に之れを產んだのであつた。我々同好會員にして、十萬圓を投資する勇氣があれば最新式な『同好會天文臺』が日本にも生れ出でやう。

昨夜は、雨がしとゞにケムブリッヂをふりこめた。そんな夜には、靜かな物語がふさはしい。それで、リンネアン氏の一隅、山本氏の假寓では、追懷談が夜半まで主客の間に交はされた。その中には天機洩らすには、時機尙早の日本天文學史の奇聞神話があつた。いづれ後年公けにさるる時もあらう。山本氏は、一年足らずの滯在中、此の町及び、ホストンで、二回の試驗の機會を與へられ、日本の天文學その活動一般狀況を語つた。私は、まだ檢閱を受けなひが、それをソツと此處に披露しやう。一回は、冬の頃、ボストン市のシチークラブ、實業家や市內の重なる有志者、六百名位の前で、シャブレー教授に次いで、日本の天文學その現勢を說き、是非に「天文の研究は、國境を無視する。それは、コスモポリタンのコスモポリタンである。日本に於いて同好會が活躍するのも、私が天文教育に微力をつくすのも、その一つの理はこゝにある。もし活動の半分が、否三分の一が、心を宇宙の研究に、向けるならば、直ちに、今日のいやな、國際的紛爭や人種的憎惡は、その痕を絕つであらう。天文の世界には、人種の色別けは、無用である。これは、國際的協力と博大な人類的努力の對象としてのみ進められて行く最高の學術的境地である。……」(此時拍手場を動かす) ……シャブレー臺長は、此の演說にスッカリ度膽を拔かれてしまつた。此れは僅に十五分の短い時このスピーチであつた。次に、されたのが天文臺主催の通俗博覽會での演說。こに角世界の天文學に關する協會で、一千二百以上を、しかも二年の短時日の間に得たものは、我が天文同好會の外に、極めて稀である。フランスに一つある外、大抵のものは、せい〳〵會員二百か三百ださうである。「之れは互に世界の珍である」と同じシャプレー氏が、演說會感嘆の聲を發したと云ふ。我等の同好會の世界的誇りと責任を今更の如く感ぜずに居られない。ハーヴード大學の天文學科の學生が僅かに五人あまり、之れは、全く今私の述べてゐる天文臺と關係なしに一つの少天文臺をもつてゐるが、それにしても、世界に名の響いた學者としては、あわれな景況である。それで、自分の所の天文學科から、天文學者を得られないで、よそから輸入してくると云つた有樣だと云ふ。アメリカがもつと此の方面に「宇宙的」に大きく覺醒するまでは、他の國が國際禮讓の表示を促がしても或は徒勞に了るのであらう。此の印象記の結びとして、私は、ボストン公立圖書館の入口へ讀者諸氏を案內したい。ポーチをはいると、そこに第一階の廣間がある。そして、既に諸君は、

黄道の圏を足の下に踏みつけてゐるのに氣付くであらう。モザイリ風に、石だゝみの敷かれた中に、圓形に黄道のサインが彫まれてゐる。エヂプト風の表現である。一寸、普通目にしない圖形がある。階上への階段に歩を移せば、此の館の誇りシャバンヌの壁畫が目につく。ミューズの神が人生に光を與へるものを召し出す。それが、階段正面の大壁畫、そして左右の昇降口の上部の壁に、ミューズの招きに應ずる四つのシムボル、哲學、詩、歴史、天文を具體化した畫が、見る者の心を引きつける。向つて左のこちらから第二の壁畫は、「科學を表象するカルデヤ人の天體觀望の圖」である。見よ、三人の裸男が、原始的な小屋の前に或は立ち、或は、ひざまづいて、目を天の一方に注いでゐる、天文學のやりごこが巧みに繪畫化されてゐる。三階に移る。此處は、藝術圖書館の入口の廊下。天井と四圍の壁畫が、例の喧ましい、サアサシャントの傑作である。北隅の天井を見上げると、そこに、恐怖の對象、モロクと、優美の化身、アシタテとが相對して描かれてゐる。昔人間の幼なき子女をその生贄としたモロクの形相のすさまじさ。馬面のやうな怪相をもつた彼の頭上に黄道圏がめぐり、太陽が赫灼として照る。太陽の光線は、幾千の手となつて、彼の四圍に雨の如く伸びて地を惠まうとしてゐる。足下には、エヂプトのおまじないに用ゐられるスカラブ風のものが踏まへられてゐる。之に對して、金星女神アシタロテのやさ姿、空色の衣をまとつて、同じ色のスカーフ(?)のなびく裏側に世にも優美な天女たちが舞踊する。天來が、此壁畫全體としては、人類の精神的向上史のいく節、恐怖と暗黑と偶像の支配から、豫言者の啓示を經て、「悲しみの女たち」と「惠みの女マリア」の對立、それから、人類の救—キリストの到來までを象徴的に描いたものであるが、往時の外道宗者の一例として描かれた天體崇拜の對象、モロクとアシタロテは見るものに一種異樣な感銘を與へる。我等は、太陽をも解剖し、金星の祕密をもあばいて、宇宙の仕組みを雄々しく檢討しやう。何しろ天井を照明する電燈の光が弱いので、明細な構圖の凡ては目にはいらぬ。「歸りませう」「大分目がいたくなつた」山本さんと私とは、奴隷解放の偉人フイリップス・ブルックスの立像を訪ねる爲、圖書館に暇を告げた。

(大正十三年八月二十七日朝、ハーヴード・カレヂ、オブザベトリの一室にて—)

○水澤緯度觀測所にて暫く風船觀測に從事してゐられた伊藤諶伍氏がこの九月から當天文臺の助手として來任せられた。